

第3章 中学生を対象とした「保育体験プログラム」の作成と評価 に関する実践的研究

1. はじめに

わが国において、少子化が問題と認識されて久しい。中央教育審議会は、平成12年4月に「少子化と教育について（報告）」を示したが、その中で、少子化への対応の基本的な考え方の1つの視点として、子育てや家庭の大切さについて若い世代の理解を深めることをあげている。そこでは、具体的方略として、特に将来の親として必要な基礎・基本を習得できるよう、子育ての意義やあり方、家庭を持つことの重要性について理解を深めることが重要であるとしている。そしてそれにともない、全国の高校において「保育・介護体験」を実施すべく、平成12年度より、「高校生等保育・介護体験事業調査研究」を47都道府県に委託し、全国で高等学校282校、幼稚園141園で研究実践をおこなっている。ところが、近年頻発する虐待問題にみるように、未熟な親が増えていることは、深刻な問題となっている。したがって将来の父親・母親を育成する必要性を重視し、育児力の低下を食い止めようとする動向は高校段階では遅く、すでに中学生から必要ではないかと考えられる。またこのような体験は、将来の育児のストレスや不安の軽減にも役立つであろう。

ところで、従来の保育体験実践は、学校サイドが主導となり、家庭科などの時間でわずかに事前指導を行うだけで、保育現場との綿密な連絡や保育者による事前指導が無いままに、漠然と進められているのが現状である。体験学習は多くの学習効果が期待できる反面、保育や乳幼児に対してとまどいを感じたり、疲れる生徒がいることなどの問題点も報告されている。また、体験の評価が無いままに、定式的な生徒と乳幼児との交流の場に終わってしまう場合も多い。乳幼児体験学習の学習効果についてはこれまでも報告されているものの、このような点を明らかにした報告、あるいは乳幼児体験学習そのものをテーマとした系統的な研究は見当たらない。保育体験をする生徒の多くが「子どもの見方が変わった」、「再びこのような体験がしたい」といった肯定的な感想を示していることから、保育体験は明確な教育プログラムとして位置づける必要があるのではないかと考えられる。さらに、保育体験の場として、従来の保育所・幼稚園に加えて、将来の親像を容易に認識し、家族生活のビジョンを持たせるという意味でも、保育所保育士あるいは子育て支援センター担当者の活用が有効ではないかと考える。

以上のことから、保育所あるいは子育て支援センターの担当者との連携のもとに保育体

験プログラムを作成し実施することで、子育ての意義と重要性についてより明確に学習できることが推測できる。したがって本研究は、こうした見地に基づくプログラムの実施と評価を通して、保育体験の意義と効果について検討することを目的とした。

2. 保育体験プログラムの計画

保育者が中学校の家庭科の授業の中で、現場サイドの視点に立った保育体験の事前指導を行い、体験が中学生にどのような影響を及ぼしたかについて、事前指導時の生徒の意識との比較による評価と事後指導が必要であるとの考えから、研究者と保育士、子育て支援担当保育士、中学の担当教諭を交えて、協議を行い、幼児と一緒に遊ぶ「おもちゃを作り、一緒に遊ぶ」という体験プログラム案を作成した。

研究の対象は H 市内の A 中学校における家庭科の授業を受けている 2 つのクラス、1 組と 3 組ともに各 39 名であった (表 1)。2 つのクラスを対象としたのは、保育士による事前講義の効果をみるためである。3 組の生徒には保育体験を行う直前に、子育て支援センター担当保育士が 1 時間、幼児の特性などについて講義を行った (1 組は保育士による講義はない)。

表 1 対象生徒の内訳

検討の対象生徒	(人)		計
	男子	女子	
1組	17	19	36
3組	15	22	37

そして、保育体験を行う事前ならびに事後に、保育体験に関するアンケートを実施した。

※1組の女子生徒3名および3組の男子生徒2名は、事前・事後のアンケートの片方のみしか回答していないため、本検討からは除外した。

また受け入れ保育園ならびに子育て支援センターの実際の保育・支援につ

いての理解が必要との考えに基づき、以下のような指導計画を立てた。

「保育体験学習指導計画案」

1 時間目：事前指導 1
・ 幼児の遊びについて理解する
・ おもちゃを自作する
2 時間目：事前指導 2
・ 保育士による講義 (幼児の育ちと保育園)
・ 保育体験事前アンケートの実施

3 時間目：保育体験

- ・各グループに分かれて幼児とふれあう
- ・自作のおもちゃで遊ぶ

4 時間目：事後指導

- ・保育体験の感想・反省
- ・保育体験事後アンケートの実施

3. 保育体験プログラムの実施

(1) 保育体験事前指導

幼児に適したおもちゃを考えて製作し、幼児の発達の実態に応じて一緒に遊べるようにロールプレイをした。以下、2つの班の例をあげる（エピソードの中で、「幼」は幼児の役割をする中学生を指す。また「教師」とは授業をする家庭科担当の教員のことである）。

ロールプレイの例（3組A班）

「これからリス組の発表をはじめます。」

「よしっ！まずはこの紙飛行機やるぞ〜！」

（全く聞いてない子もいる）

「これを、こういうふうには飛ばしてみな。」

幼：（やってみる）

「じゃあ今度は魚釣りをしよう。」

「ほらっ！こんなふうには。じゃあやってみて！」

幼：（釣ってみる）

「うまいねー！」

（他の幼児たちはじっと待っている）

教師：「子どもたちいい子ねー。じっと待ってるの？」

幼：「飛行機で遊んでいい？」

「いいよ〜！これはね、こうやってやるんだよ。」

幼：「おもしろくないっ！！」

「じゃあやめよう…。」

(沈黙)

「これで発表を終わります。」

ロールプレイの例 (3組B班)

「これから発表をはじめます。」

「こんにちは！はじめまして。」

「まずはこれから説明しよう。このコマで遊ぼう。」

幼：(まわしてみる)

「ねー、まわるでしょ。これでどのコマが一番まわるか勝負しよう！」

幼：(まわしてみる)「これ、難しいなあ…」

幼：(玉入れで遊んでみる)(静かに遊ぶ)

教師：「はいっ！非常に静かな子どもたちですが、今からは子どもの対応というのも考えてみてください。

子どもの動きは…おとなしい子ばかりだねー。S保育園の園児さんっておもちゃに近づかないんだねー。

いい子ばかりみたいですが、子どもって本当はどんな動きをするかなっていうのを考えてみて下さい。

はいっ、2・3分あげるから！」

(活発な話し合い)

このエピソードからは、A班、B班に共通して、生徒の遊びやおもちゃの提示に対して幼児の具体的な反応を想像できないということがあげられる。表2にあるように、1組、3組を通じて幼児のきょうだいがいる生徒はわずかに3人だけであり、生徒の生活の中でも幼児とのかかわりを体験できる機会がないということが大きいと考えられる。

表2 きょうだいの数

自分のきょうだいに幼児がいる人(人)

	幼児有り	幼児無し	計
1組	2	34	36
3組	1	36	37

対応について詳細にみると、両班には幼児へのかかわりの違いがみえる。たとえば A 班の場合には、おもちゃを提示して生徒と同じことを「やってみさせること」に重点を置いた誘いかけをしているのに対し、B 班では「どのコマが一番まわるか勝負してみよう」に見られるように、より幼児に対して遊びへの喚起を促していることが注目できる。また B 班のロールプレイに対し、教師も具体的に幼児の行動を想起できるように投げかけている。これにより幼児の反応に対する発言が多くなり、議論が活発になっていると考えられる。

幼児の反応やそれに対する働きかけを想起し促すことをねらったロールプレイであるが、幼児についての具体的なイメージがない場合には、これらの例のように生徒側からの一方的な働きかけになりがちであるということが推察される。つまり、ロールプレイに入る前にすでに幼児の育ちや遊びについての基礎知識を得ておくことの必要性が示唆されたのである。

(2) 保育士による講義

保育士ならびに研究者が中学校に出向き、保育体験の事前指導を観察した。また、保育士による事前講義を1時間行った。その内容は以下のような事項を含むものであった。

- ①乳児期の子どもの発達と遊び
- ②幼児期の子どもの発達と遊び
- ③子育ての実際と子どもにかかわる仕事

なお、講義は以下のような意図をもとに計画されたものである。

「子育て支援センターにおいて、乳幼児を持つ親の姿を見ていると、中学生と同じように経験の不足から、子育ての知恵がなく、子育て不安を起している様子がみられる。もし中学生の時代に有効な保育体験をし、それを通して少しでも子育ての知恵を得ることができたと

したならば、少しでも子育て不安が防げるのではないかと思い、子育ての知恵を提供するという意図を持って授業を組み立てた。」(授業者の学習指導案より)

この意図に基づき、学習の流れを以下のように計画した。

1. 実習先の様子を知る

○保育園で行っている具体的な保育支援事業について知らせる（一時保育、障害児保育、子育て支援センターのことなど）。

2. 子どもに関する仕事について知る

○幼稚園教諭と保育士の資格の違いについて知らせる。

○幼稚園教諭と保育士の資格を取得するための進路について知る。また、養成大学でどのようなことを学ぶのかについて知らせる。

3. 0歳児の育ちについて知る

○「泣く」ことが0歳の子どもにとってどのような意味を持つのかを知らせる。

○「抱きぐせ」の必要性について知らせる。

○「基本的信頼感」の確立の大切さを知らせる。

—「人見知り」「後追い」などがどうして起きるのか、起きた場合、親はどのような状態になるのかを具体的に知らせる。

○母親が子育ての主体になるこの時期の父親の役割について、想像できるように、生徒の反応をみながら知らせる。

4. 1歳児の育ちについて知る

○歩行の開始にともなって起きる、いろいろな事件について話すことにより、怪我などの危険が急激に増える時期であることを知らせる。

○「私」という存在が大切だということを学ぶ時期であることを知らせる。

○「かみつき」がとて多い時期であること、「かみつき」がこの時期にとって、ことばの代わりであることを知らせる。

○トイレトレーニングに関する要件を知らせる。

—トイレトレーニングによって、自己決定の力がつくこと。

—基本的信頼感がなければ、なかなか自立しにくいこと。

5. 2歳児の育ちについて知る

○「自分」を確立していく時期であることを知らせる。

6. 3歳児の育ちについて知る

○ことばの確立の時期であることを知らせる。

○善悪の判断の発達過程であること、その成長のために大人が何をしなければならないかを知らせる。

7. 4歳児の育ちについて知る

○想像力がのびてくる時期であること、それによって、「うそ」をついていると、親が心配になる時期であることを知らせる。

○自信がついて冒険をする時期であることを知らせるとともに、信頼感が大人と子どもをつなげる絆になることを知らせる。

8. 5歳児の育ちについて知る

○自分で決め、決めたことに責任が持てるようになってくることを知らせる。

○性を意識し始めることについて知らせる。

○今の自分たち(中学生)は第二次性徴期であること、そして自分の性を大切にすることと相手の性を大切にすることの大切さを知らせる。

9. 妊娠中の胎児の様子について知る

○夫婦の関係、母親を取り巻く環境が、胎児に大きく影響することを知らせる。

10. 実習の様子をつかむ。

○先輩の実習の中で印象的だった姿を知らせることで、元気に遊ぶだけが実習ではないことを知らせる。

11. 子どもとかかわりするためのポイント

○視線の高さをあわせることの重要性を知らせる。

○声の大きさ、高さが子どもに大きく影響することを知らせる。

12. 絵本を読んでもらうことを経験してみる

○絵本を読み聞かせることで、園児の立場を経験させ、子どもにとって何が心地よいのかを知らせるとともに、絵本を通して、人生観を見直していく機会にする。

13. 事例を考え、書いてみる

○事例を考えることによって、話で聞いたことを整理し、自分の子どもに対する姿を客観的にみる機会にする。

また、本時において、中学生が現時点で乳幼児に対してどのような意識を抱いているのか、心理的・社会的観点からの事前アンケート調査を実施した。

主な質問項目は、家族構成、きょうだいの有無と年齢差、結婚・出産の希望、育児に対する種々の認識、乳幼児に対する発達の理解などに加え、対児感情3項目、幼児理解4項目、学習意欲2項目、子育て意識2項目から成る。質問項目を表3に示す。

表3 保育体験質問項目（事前・事後）

「対児感情」項目
1. 幼児と一緒にいると楽しい
2. 幼児に興味がある
3. 幼児がうるさくするとイライラする
4. 幼児の相手をするのは面倒だ
「幼児理解」項目
5. 自分は幼児など小さい子どもが好きの方だ
6. 自分は幼児の気持ちがわかる方だ
7. 自分は幼児を喜ばすことができる方だ
「学習意欲」項目
8. 幼児と遊んだりふれあってみたい
9. もっと保育体験についての学習をしたい
「子育て意識」項目
10. 保護者と出かけたり遊びに行くのが好きだ
11. 保護者は自分にとっておせっかいである
12. 保護者に対し育ててもらって感謝している

(3) 中学生の保育園訪問による保育体験

作成した保育体験プログラムに基づき、保育体験を実施した。事前に保育者、家庭科教師、研究者との間で体験に関する目的や活動についての協議を行った。当日は、生徒と幼児のかかわりをVTRで録画した。また相互のやりとりを参与観察で記述した。以下、保育体験のねらいをまとめる。

- ①子どもに親しむ—幼児と自由にふれあう中で、幼児の視点や特徴に気づく。
- ②保育所における保育体験—年少、年中、年長クラスに入り、生徒が自作したおもちゃでの遊びを中心に保育活動をとにする。
- ③年齢に応じた幼児へのかかわり方がわかり、幼児に対する理解が増す。
- ④子育てをする親への理解や共感ができるようになる。

保育体験記録

対象クラス：ぞう 名前：中学生 M (女)

保育体験の活動内容と発言

Mを含め、中学生2人がクラスに入る。
 【お絵かき】—絵を描いている子ども複数にかまる。
 男児 A：「お姉ちゃん、書き書きして」と紙を差し出す。
 M：「えっ…、困ったなー。」
 男児 A：さらにせまる。
 M：「あんた美術部じゃん。」ともう一人の中学生を指さす。
 指さされた中学生：別の女児 B の紙に描く。
 男児 A：「はよ描けよー。」と M さんにせまる。
 M：「私？描けない。」「描くべき？」ともう一人の中学生に尋ねる。
 男児 A：「描いて。」と再度せまる。



M：「あのお姉ちゃんが描いてくれる。」と再びもう一人の中学生を指さす。

【カードゲーム】一男児 C と 女児 D と 3 人です。最初各自に 3 枚カードを配る。その後「いっせーのーで。」の掛け声で手持ちカードのうち一枚を隣の人に渡していき、同じ絵柄が 3 枚揃うと勝ちというルール。

全員：「いっせーのーで。」とカードを渡す。

男児 C：「三枚蛇きたー。」とみせ、「一番負けたのお姉ちゃん。」という。

M：「そのようですねー。これじゃあねー。」とカードを女児 D にみせる。

【カルタ】一男児 A など 5 人です。男児 A が読む係でお題を出す、カルタをとった子どもが気に入らない子だと振り出しに戻し、読むカードを変える様子。

M：「かえちゃったよー。」という。

男児 A：「いいの、気分なんだから。」

他児：男児 A からカードを取り上げようとする。

M：「みんなでやろうよ。」

男児 A：放り投げる。

M：「ダメだよー。」

男児 A：移動する。

その後、残った 3 人です。女児 E が読む係になる。

女児 E：小さい声で読む。

男児 C：「おっきな声じゃないとわからんじゃん、もー。」といい、ぐずる。

M：女児 E の言ったあと、大きい声で読み返す。

男児 C：「届かんよー。」といい、再度ぐずる。

M：移動し、スペースを作る。

男児 C：とる。

M：「すっごい、とれたじゃん。」

その後、カルタを続ける。

中学生 M は、活動当初子どもからの要求にとまどい、同級生に助けを求める姿が目立った。そのため、M がどのようにして子どもとの接点を作るのかを観察のポイントとした。観察の時間軸が短いが、M がカードゲームによって徐々に子どもとのかかわりに慣れ、カルタではわがままである男児 A に対して気を配り、その場をまとめて再度カルタを行っていく様子が見える。その後のカルタで M は、男児 C の要求に対しても適切な応答ができ、遊びの支援ができるようになっていった。

これ以降、「すごろく」や、外での遊びで M の幼児とのかかわり行動を記録したが、すっかり幼児に慣れた様子だった。また、子どもも多く彼女に寄っていく姿が観察された。ただ、やはり、一人よりは同級生の存在は大きいようで、同級生も加わって複数で行う活

図2 3組の生徒の保育体験による
事前・事後の変化

動だと特に生き生きとした表情になり、子どもに対する声かけが大きな声になり自信を持つことができるようであった。このことから、保育体験もグループで実施する場合と一人である場合では、その効果も違ったものになることがうかがえる。今後は、このような点も踏まえて体験学習を計画する必要があるだろう。

(4) 保育体験事後指導

保育体験を終えて、子育てに対する意識変容をアンケートにより調査し、保育体験の前に実施したアンケートの結果と比較した(図1・2)。

1組と3組の両方とも保育体験を通じてそ



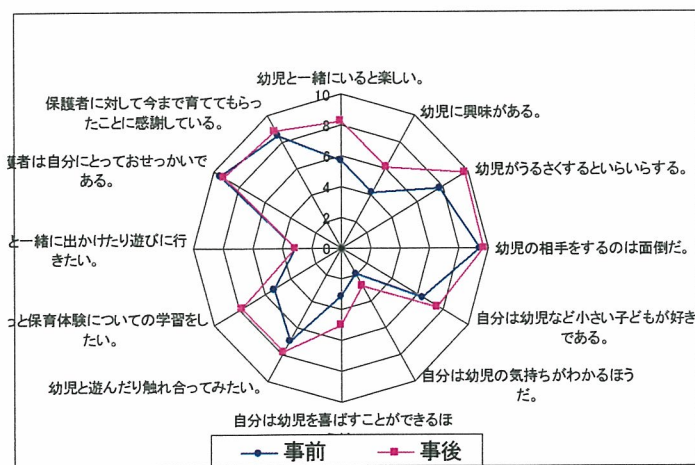


図1 1組の生徒の保育体験による事前・事後の変化

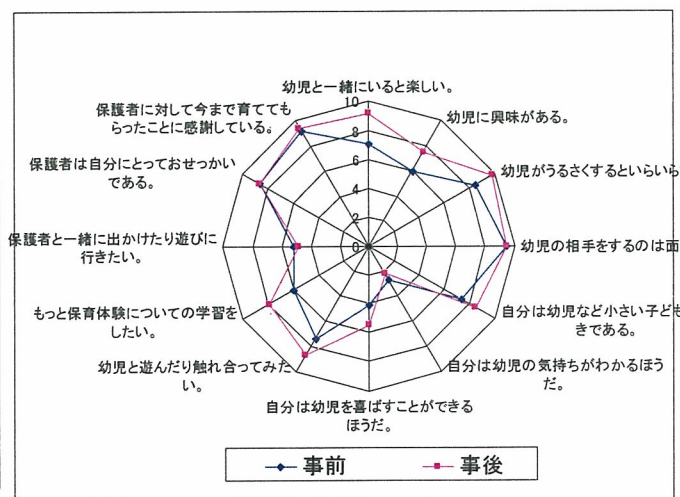


図3 1・3組の保育体験による変化(学習項目)

それぞれの項目で得点の向上が認められた。「幼児と一緒にいると楽しい」、「幼児がいてもうるさくなくイライラしない」、「幼児を喜ばすことができるようになった」、「もっと保育体験の学習をしたい」という項目において得点の変化すなわち意識の変化が大きくみられた。

特に対児感情項目での得点の上昇が顕著であり、具体的な幼児とのふれあい体験が、幼児についての心理的な親近感を深めることになったといえよう。さらに保育体験への学習意欲も高く変化したことも興味深い結果であった。これは、これまで保育体験の効果が高校生からという成功研究が多い中で、中学生においても計画的になされた保育体験が効果があることを実証するものとして考えられよう。

ただ、「子育て意識」に係る自分の保護者との関係については、「自分を今まで育ててくれたことに感謝する」、「保護者はおせっかい」、「保護者と外出したい」などといった項目で変化は認められなかった。つまり、中学生においては、保育体験は自分と幼児との関係において認識はされるものの、親と自分という関係においては再認識されることは少ないということを意味している。この点については、高校生など年齢が上がると、自分と親との関係を再認識できる機会となることが多いという報告もある。中学生段階について、本研究では、計画された保育体験を通じては、まだ年齢的に「子育て意識」と結びつけるのは難しいかもしれないということが示唆された。

全12の質問項目を「対児感情」「幼児理解」「学習意欲」「子育て意識」の4つにカテゴリーライズして、それぞれのクラスでの意識変容を表したのが図3である。

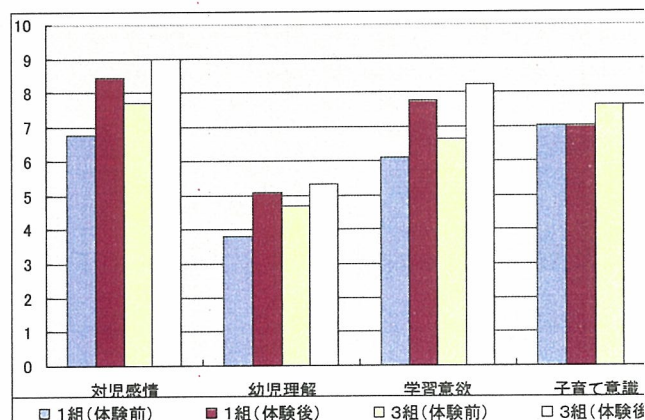
1 組（保育体験の前に保育士による講義を受けていない）、と 3 組（保育体験の前に保育士による講義を受ける）とを比較することで、本研究で計画された保育士による講義の影響を見ることができる。以下その結果と考察を述べる。

この分析からは、統計的に有意な差として認められなかももの、「対児感情」「幼児理解」において、保育体験をする前に保育士による講義を受けた 3 組の生徒のほうが得点が高く、また保育体験をすることでさらに得点を上乘せしていることがわかる。その一方で「学習意欲」「子育て意識」の向上には期待したほど影響が大きくなかった。今後、この点を考慮した事前指導のあり方が必要となろう。

以下、保育体験後の自由記述から保育体験が「よかった」という生徒の記述をあげる。

保育体験が「よかった」とする理由

- ・子どもの純真な心に触れることができた。
- ・子どもたちのほうがしっかりしていて、私たちのほうが恥ずかしくなった。
- ・授業で習ったとおりであり、先生のことばが思いだされた。
- ・保育士さんが尊敬できた。困った時に助けてくれた。
- ・何かと自分の将来に光が見えた。
- ・子どもには勉強よりも大切なものがあることがわかった。
- ・1 時間がとても短かった。仲良くなってすごく楽しかった。毎日でも保育園に来たい。
- ・子どもは好きだったが、今回訪問してますます好きになった。いつか自分も保育士になりたい。
- ・「自分にもこんな時があったんだ」と実感した。
- ・3 歳児と遊んだが、ことばを一生懸命話そうとする姿がとてもかわいい。
- ・最初はちゃんと遊べるか不安だったが、みんなかわいくて人なつっこくて、すごく楽しかった。



このように、自由記述においても、大多数の生徒が保育体験を「よかった」としてとらえ、その意義を肯定的にとらえていた。統計的な分析はしていないものの、保育体験場面の観察と自由記述の結果からは、女子生徒よりも男子生徒のほうに、保育体験前の幼児に対する期待も低く不安であるとする生徒が多いが、体験中はむしろ一生懸命幼児と遊ぶ様子が観察された。また自由記述においても、当初の予想とは違った幼児の姿に驚き、楽しんだとの感想があった。ただ、男子生徒の場合、保育体験活動を受け入れる保育所側からは、身体的に過活動になりがちで、生徒は勿論のこと、幼児も疲れ果ててしまうという声も少なくない。今後は、このように体験する生徒の性差や性格特性にも配慮した計画がなされることが望ましいと考えられる。

4. 「保育体験プログラム」の作成と評価

本研究で対象となった T 中学校の授業の評価を基礎として、ここでは望ましい「保育体験プログラム」のあり方について述べる。

(1) 事前指導の必要性

T 中学校では、保育学習の導入として保育体験を実施している。保育体験については保育体験を導入に実施する学校と、まとめとして保育学習の最後に実施する学校がある。T 中学校の実践は、事前指導を受けた後に、実際に幼児とふれあう中で生徒がみずから課題を見つけ出すことが、その後の保育学習への意欲にもつながる、ということを重ねた点で意義のあるものである。これとは逆のスタイル、つまり導入の部分に実習を取り入れる場合では、中学生段階では、本研究のアンケートにも見られるように、幼児に対する理解が低く、また体験への意識が低いまま訪問を行うことになるため、その意義はそれほど高くはないことが予想される。

また、T 中学校のように、保育園へ持っていくおもちゃを作成するという試みは、保育園へ行ったとき、幼児と接したことのない生徒でもおもちゃを介在として、幼児とふれあいやすくする上で有効な手立てであると考えられる。時間をかけて作ることによって、保育園に行く際の心構えにもなり、またロールプレイを行うことで、おもちゃによって幼児を引きつける方法を自分なりに工夫できるという点でも有効であろう。

(2) 保育士の講義とビデオの有効活用

保育体験の事前指導では、幼児の様子や保育園に行つてどのように幼児とふれあつてい

くのかということがイメージを持ちやすいように、受け入れ先の保育士による説明やこれまでの保育体験の様子ビデオを見せるなどは有効であると考えられる。ビデオには、幼児がおもちゃで遊んでいる場面や、泣き出した子がいる場面、けんかをはじめてしまった場面など、できるだけ保育生活で生起するさまざまな場面を抽出したものを準備することが望ましい。

さらに、ビデオを見ての感想を書かせ、生徒たちに発表させることも有効な手立てであろう。ビデオを視聴する前にどのようなことをポイントとしておさえて見るのかを事前に説明する。

また、保育士の講義のねらいは次のようなものが望ましいだろう。

○幼児と遊ぶ上でどのようなことに注意すべきか。

○年齢によってどのような特徴が見られるか。

○幼児と遊ぶおもちゃにはどのようなことに配慮することが必要か。

講義後にはこの3点について、またビデオを見て不安に思ったことなどについて、グループで話し合い、意見をまとめて発表させる。

(3) 幼児向けおもちゃの作成

話し合ったことを参考に、作成するおもちゃはどのようなものがよいかを考えさせ、教師側でそれをまとめた上で、幼児の遊びとおもちゃの意義について講義を行う。どのようなおもちゃを製作するかについては、ここでは生徒はまだおもちゃについての学習が不十分なこともあり、教師側で選んだいくつかの選択肢の中からグループで一つ選んで製作するのがよいかもしい。加えて、おもちゃについては、保育体験後に幼児と実際に遊んだ経験を活かして、改良するといった学習も必要と考えられる。そのとき、自分たちが作成したおもちゃが幼児の活動にどのように影響していたかということについて学習を深めることもできる。

ここで、教師側が用意しておくおもちゃとしてどのようなものを選択するかが問題になってくる。これまでの事前授業や保育体験の観察からは、次のようなものが比較的幼児に受け入れやすいものとして挙げるができる。

- ・びゅんびゅんゴマ
- ・魚釣りキット
- ・パズル
- ・ゴム鉄砲
- ・野球セット
- ・輪投げ

・ひらがなカルタ ・指人形

生徒が準備したおもちゃに幼児が夢中になるのはよいのだが、おもちゃによっては夢中になりすぎることによって生徒との会話があまりなくなってしまうというものもあった。またゴム鉄砲は、少し安全性に欠く部分もあり、お土産として園に残しても、その後、幼児だけで遊ぶのには適さないと考えられるので、提供に際しては配慮が必要である。ひらがなカルタは、年長、年中組の幼児がちょうど字に興味を抱く時期ということもあり人気があった。また、「どれかなー?」「あっ、すごいねー。」などと遊びを介した会話も活発にみられた。

指人形は、裁縫の得意な女子生徒が上手に作っていた。裁縫で作ったものは、やはり他のおもちゃに比べて丈夫であり、お土産として持っていても保育所にずっと残しておけると思われる。その他、牛乳パックや、ダンボール、ガムテープなどを使って作ったおもちゃは、手作りの温もりもあり、また生徒と幼児が1時間遊ぶためおもちゃとしてはすぐれている。しかし、やはり丈夫さという面に欠けるため、訪問後もずっと園に残しておくというのは難しいようだ。

以上の点を踏まえ、以下に、中学生を対象とした望ましい保育体験の指導のプログラム案を提案する。

保育体験の指導の計画(案)

人間の成長と家族の役割について
(10月21日)

ねらい：人間の成長の中で幼児期の重要性について知る。幼児の発達における遊びの重要性がわかる。自分たちが小さい頃遊んだ遊び、おもちゃについて話し合う。

保育体験グループ分けとおもちゃ作成について
の話し合い(10月28日)

ねらい：幼児の人数に合うように生徒のグループ分けを行う。各グループの幼児の発達の特徴

について理解し、相応しい遊び・おもちゃについて話し合いを通じて認識することができる。またその際、幼児がどのように遊ぶのか想像できる。

おもちゃの協同作成と遊び方
(11月10日)

ねらい：各自が持ち寄った遊び・おもちゃの中から、対象となる幼児に適切なものを選ぶことができる。また年齢に即した遊び方やそのための誘導の仕方がわかる。

保育士による講義
(「子どもの育ちを通して、今の自分を見つめ、将来の自分に思いを馳せる」)
事前アンケートの実施

ねらい：子どもの心の育ちに興味を持ち、自分の育ちをみつめ、親の役割、思いを知ろうとする。それぞれの年齢の心の発達の特徴をとらえる。各年齢の子どもの姿の中から、自分の小さいときの姿との類似点を思い起こす。自分の性、相手の性を大切にすることの重要性を知る。保育実習に期待を持ち、実習に必要な知識を知ろうとする。

作製したおもちゃのグループ発表(ロールプレイ)(11月17日)

ねらい：おもちゃを使って実際にどのように遊ぶか、幼児の反応を考え、各グループごとにロールプレイを通じて発表する。年齢に相応しい遊びを想像し、そのための支援の手だてが理解できるようになる。

S保育園での保育体験(1回目)
(11月24日)

ねらい：体験のねらいを自覚し、幼児の集団に

自然に入れるように気をつける。幼児、生徒ともに緊張感がほぐれ自然に遊べるような雰囲気を理解する。幼児に対してどのようにふるまい、ことばがけをすればよいのか理解できる。一対一の対応から、他の幼児も巻き込めるような広がりのある集団活動になるように配慮できる。

事後指導

事後アンケートの実施（12月1日）

ねらい：保育体験したことの感想を話し合う。困ったこと、支援したことについてそれぞれの考えを述べる。保育士の仕事について理解する。

S 保育園での保育体験（2回目）

プログラム評価のアンケートの実施

（2月24日）

ねらい：グループで保育体験に参加するのではなく、今回は個人として各クラスに入る（希望者のみ）。自由遊びの中で様々な子どもの遊びの様子を理解し、一日の活動の中で保育という仕事を理解する。

5. まとめ

カナダやニュージーランドでは、思春期からの保育体験を学校教育プログラムとして取り入れており、子どもや育児についての意識の深化を図っている。わが国では、先述のように、文部科学省の主導の下「高校生等保育・介護体験事業調査研究」を開始し、指定校において、乳幼児とのふれあい体験学習の効果・役割について報告されている。こうした報告からは、たとえば、幼児から自分が受け入れられたことの喜び、自分を育ててくれた人への感謝など、生徒たちの心情面への働きかけが大きいという知見が見られるが、一方で、その受け皿としての幼稚園や保育所などがどのように対応しているかは十分に検討されてはいない。千羽（2002）は、このような保育体験が、生徒に与える教育的意義を考えたとき、①生徒への事前・事後の指導、②学校と園などとの連携のとり方、および連携の

仲介機関のあり方、など実施上の問題点への対応が今後の課題であるとしている。本研究はこうした課題に対応するものと位置づけられる。

また本研究は保育者が中学校の家庭科の授業の中で、保育現場サイドの視点に立った保育士による保育体験の事前指導を行い、体験が中学生にどのような影響を及ぼしたかについて、事前指導時の生徒の意識との比較による評価と事後指導について分析し、望ましい保育体験プログラムについて提案した。

保育体験の終了後、子育てに対する意識変容をアンケートにより調査し、保育体験の前に実施したアンケートの結果と比較した。その結果、高校生と違って子育てに関する意識は高くはないものの、明らかに保育士の事前指導を受けた中学生は、自分たちの乳幼児期や、子育てという営みに対して具体的な問題意識を持つことが明らかとなった。今後、中学校における保育体験では、受け入れ側の保育者、また子育て支援センター担当者によって、生徒が将来の親となる準備として子育て意識の深化を目的とするような事前授業の工夫や配慮が必要であること、そしてそのためには保育所と中学校との十分な連携の必要性が示唆された。

文 献



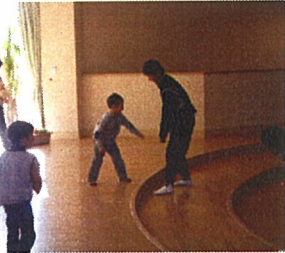
- 武藤八恵子・伊藤葉子（1998）保育領域における情意の評価と指導（第3報）—加齢と指導の影響—。日本家庭科教育学会誌，31（1），39-46.
- 松村京子・大路雅子・山口香織（2002）幼児との交流時における高校生の対児行動—対児感情と性別による違い—。小児保健研究，62（1），66-72.
- 大路雅子・松村京子（1998）高校生の幼児体験学習時の対児行動に関する研究（第2報）—対児行動出現率と対児感情との関係—。日本家庭科教育学会誌，41（4），39-43.
- 大路雅子・松村京子（2002）幼児体験学習時の中学生と高校生の対児行動。小児保健研究，61（3），489-495.
- 瀬之ロスマ・山下公子（1965）高等学校における保育教育の研究Ⅰ—「家庭一般」と「保育の現状」—。日本家庭科教育学会誌，8，17-22.

< 11月21日（年中児クラス） >

男子2名、女子3名の参加。9：00～10：40まで。10：20まで自由時間、以後集い。

女子は入室と同時に各自子どもと遊びますが、男子は常に二人でいる。教室中心で工作や絵本を題材に遊ぶ。

<男子A（左側）の戸惑いと男子Bへの依存>

<p>9:10 座って話</p> <p>子どもをひざに乗せて座る。話し中、子どもに対する笑顔はぎこちなく、常に相方の様子を伺う。子どもより相方の方が気になる様子。しばしば会話に困ることもあった。</p>	
<p>9:25 相方の様子伺い</p> <p>1人の子どものが広告を指差して男子Bに質問する。男子Bは笑顔で質問に答える。男子A、会話なく子どもとの関わりに困る様子。男子Bに話しかけ、間を持たせる。</p>	
<p>9:45 鬼ごっこ</p> <p>男子Bが子どもに連れられて、ホールへ。男子Aは取り残されないように別の子どもを誘い、ホールへ行く。鬼ごっこをする。気持ちがほぐれた様子で楽しむ。</p>	

<感想>

遊び方が子ども主導になることが多いため、受け入れ方にとまどうと子どもとの関わり